二〇一八年度　埼玉県公立高校入試問題

五〇分
一〇〇点

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

> 明治三十九年、沖亀乃介（おきかめのすけ）は高村光太郎（たかむらこうたろう）と出会い、絵の才能を認められた。その後、亀乃介が十六歳のときに、光太郎の父である光雲（こううん）のもとで家事を手伝いながら、絵の勉強をすることになった。そんなある日、バーナード・リーチという青年が光雲を訪ね、ロンドンの美術学校で出会った光太郎について話し始めた。

「コウタロウは、日本のさまざまなことを私に教えてくれました。四季折々の行事や、郊外の山や川の美しさ……それに、彼が住んでいる東京がどんどん発展していること。交通も発達して、色々な国の人が訪れるようになり、さまざまな文化が入ってきていること。まるで、目の前に日本の様子を写した絵を広げるように、彼は話してくれました。」

さらに光太郎は、こんなふうにも言ったという。日本は、芸術に関して、もっともっと西洋に学ぶべきだ、と。

というのも、日本にはすぐれた独自の芸術があるが、西洋人はそれをほとんど知らない。自分は、日本の芸術も、また芸術家も、西洋に負けないほどすごいのだ、ということを、外国人にも知らしめたい。

そのためには、まず、西洋の芸術について、詳しく知らなければならない。相手のことをよく知った上で、こちらのことも知ってもらう。それが、フェアだと自分は思う。

「私は、コウタロウとさまざまな話をするうちに、だんだん、日本へ行きたい、という思いが強くなってきたのです。」

と、リーチは、熱っぽく語った。

日本の文化や芸術をもっと学びたい、そしてできることなら、イギリスの文化や芸術を日本の人々にもっと知ってもらいたい。――自

分にしかできない方法で。

自分はエッチング※が得意で、エッチング印刷機も持っている。これを持って、日本へ行き、エッチング教室を開いてはどうだろう——？

光太郎は、いいアイデアだ、と言ってくれた。エッチングは、確かに、日本ではまだそんなに知られていないし、ちゃんとした印刷機もないように思う。印刷機があれば、簡単にできるだろうし、何より日本には浮世絵の伝統がある。版画に対して興味を持つ人はたくさんいるはずだ、と。

「コウタロウは、また、こうも言ってくれました。——エッチングの技術を伝えるアイデアもすばらしいけれど、何よりすばらしいのは、君が本気で日本に行こうと考えていることだ、と。」

日本には、君のように、日本と西洋、双方の芸術を理解し、高め合おうとする人物の到来が必要なんだ。

光太郎のそのひと言で、ついに日本行きを決意した、とリーチは語った。

「私は、政治家でも外交官でもありません。けれど、東西の交流のために、私にしかできないことがあるのではないかと、こうしてここまでやって来ました。」

そう言って話を結ぶと、リーチは、ずっと握りしめてくしゃくしゃになってしまった紙片を、座卓の上に差し出した。この家の住所と、「高村光雲　光太郎」と書かれてある紙片。光雲は、それを手に取ると微笑(ほほえ)んだ。

「①<u>まったく、困ったやつだ。無責任に、誰や彼やとこの家に送り込んできよって……。</u>」

そして、愉(たの)しげなまなざしを、亀乃介に向けた。亀乃介は、赤くなって、小さく身を縮めた。

リーチは、その夜、とりあえず、高村光雲宅に泊まることとなった。

友の書いた住所を握りしめ、東西の文化交流を夢見て、はるばるイギリスから日本までやってきたのだ。②<u>その強く確かな思い</u>にこそ、光雲は動かされたようだった。

リーチさんは二、三日ほどここに滞在するから、その間、身辺のお世話をするようにと、光雲から仰(おお)せつかった亀乃介は、リーチを客間へと案内した。

「そういえば、私はまだ、君のことをよく知りません。教えてもらえますか、カメちゃん？」

リーチが尋ねた。

「なぜ、君はそんなに英語が話せるのですか？　外国へ留学していたのかい？」

亀乃介は、いいえ、と首を横に振った。

「僕は、横浜港の近くの食堂で世話になっていました。母が、生前、そこで働いていて、子供の頃からずっと食堂で育って、手伝ってもいたので……。外国人のお客さんが大勢やって来て、毎日英語を聞いているうちに、なんとなく、わかるようになったんです。」

「なるほど。それは、とてもいいね。」

リーチが言った。

「それで、どうしてここに住んでいるの？　君は、コウウン先生の助手なのかい？」

亀乃介は、ここへ来ることになった経緯を、かいつまんで話した。

亀乃介の話を、リーチはたいそう興味深そうに聞いてくれた。

亀乃介が芸術家を志し、この家の書生※になったきっかけが、やはり高村光太郎からもたらされたものだと知ると、たまらないように笑い出した。

「ああ、コウタロウ！　君ってやつは……なんという男なんだ！」

まるで目の前に友がいるかのように、愉快そうに言って、ため息をついた。

「カメちゃん。私と君は、まるで、同じ運命のボートに乗った仲間のようだ。そう思わないかい？」

同じ運命のボート。――思いがけない言葉だった。

が、それは、まさしく、その日いちにちリーチとともに過ごした亀乃介が、リーチの身の上に自分自身を重ね合わせて、この人と自分はどこかしら似ていると、胸に浮かんでいた思いを表現するのに、ぴったりなひと言のようにも感じられた。

「それで、君は、ここでコウウン先生の助手をして、将来は、コウウン先生のような彫刻家になりたいと思っているのかい？」

リーチの問いに、亀乃介は、すぐには答えられなかった。

光雲のアトリエで見る彫刻の数々は、生きているかのような迫力があり、圧倒される。けれど、自分がそういうものを創れるとは思え

ない。

何かもっと違う表現の道があるのではないかと、亀乃介は思い始めていた。

この家の人は皆優しいし、光雲の妻のわかが自分を重宝がってくれるのは嬉(うれ)しい。決して居心地は悪くない。

けれど、いつまで書生を続けたらいいのか、いつまでもいてはいけないのではないか、という、漠然とした焦(あせ)りが霧のように心にかかってもいた。

翌日、高村光雲は、勤務先の東京美術学校にリーチを連れ出すことにした。そして通訳として、亀乃介も同行することになった。

亀乃介は必死になって通訳に励んだ。

誰もが興味津々(しんしん)で、矢継ぎ早にどんどん質問をぶつけてくる。亀乃介は追いつくのに一生懸命で、しまいには、何を聞いたか、何をしゃべっているか、何がなんだかよくわからなくなってしまった。

昼食は学校の近くの食堂で取り、午後は光雲の受け持ちの教室をリーチとともに視察した。そこで、亀乃介は初めて、本格的な美術の実習——木彫の授業だった——が、どのようにして行われているのかを知った。

——すごい。

光雲の指導を受けながら、一心不乱に木(もく)を刻む生徒たちの様子を見て、亀乃介は、知らず知らずのうちに握りしめた手の内側に、じっとりと汗がにじみ出るのを覚えた。

この教室にいる生徒たちは、全員、選ばれた人であり、恵まれた人だ。

難関の美術学校の試験に合格して、難しい本を読み、教授の高尚な話を理解し、高度な技術を身につけて、さらには芸術的感性を高めるべく、いま、この教室で作業に励んでいる。

あまりにも、違うのだ。——自分とは。

リーチとともに美術学校で一日を過ごした亀乃介は、かえって意気消沈してしまった。

芸術家になりたい、などと言って横浜の家を飛び出しはしたものの、それでほんとうによかったのか。

描きたい、創りたいという思いは募れど、なかなかかたちにすることができない。どうすれば突破できるのだろうか。

「オオ、なんという桜の花の美しさだ。日本の春は、なんというすばらしい季節なのだ。」

美術学校からの帰り道、咲き始めた桜を眺めながら、リーチと亀乃介は並んで歩いていた。

リーチは、頭上いっぱいに薄い雲のように広がる桜を眺めながら、しきりに感嘆している。亀乃介のほうは、通訳疲れもあって、③ぐったりとうつむいて、下駄（げた）のつま先ばかりを眺めていた。

すっかり暮れてしまった空を仰ぐと、漆黒の中にやせ細った月が浮かんでいるのが見えた。

それを眺めながら、しみじみとリーチが言った。

「私は、日本に来てよかった。」

自分は、すっかりこの国に魅了されたと、情感のこもった声でリーチは語った。

「しかし、何よりよかったと思うのは……コウウン先生がすばらしい人物であったこと。そして、君と会えたことです。」

亀乃介は、うつむいていた顔を上げた。そして、真横のリーチを見た。

※鳶色（とびいろ）の瞳にこの上なくやさしい色を浮かべて、リーチは亀乃介をみつめていた。

「そんな……自分は……自分は、下手な通訳をするだけで、なんのお役にも立っていません。芸術のことなど何もわからない、無粋な人間です。」

顔を赤くして、亀乃介は言った。

「そんなことはない。」

亀乃介の謙遜を、リーチはやわらかく否定した。

「だって、君はほら、たったいま、『無粋（テイストレス）』と言った。ごく自然に。その言葉は、私と会話を始めてから学んだんだろう？」

そう言って微笑した。

「君は、すばらしい能力の持ち主だ。そして、私と同じように、誰かと会話を成立させたい、心の交流をしたいと強く願っている。だから、この二日間で、あっという間に英語が上達したんだよ。」

日本人でもイギリス人でも、世界中どんな国の人でも、これからの芸術家は共通の言葉を持つ必要があると、自分は思う。なぜなら、芸術品は自国の中だけで流通したり、自国の人々だけが楽しんだりすればいい、という時代では、もはやなくなってきているから。

自分には、各国の芸術家たちが、海を渡り、国境を越えて交流する未来が見える。だからこうして日本へとやってきたのだと、リーチは語った。

「だから君にも、芸術家になれる素質が十分にある。そして、君にも、きっといつか海を渡る日がくる。」

④リーチの言葉を聞いて、亀乃介の胸の中に一陣の風が吹き込んだ。

芸術家になれる素質がある。——いつか海を渡る日がくる。

ほんのひと言、だった。けれど、大きな大きなひと言だった。

亀乃介は、目の前で、固く閉ざされていた芸術の世界への扉が、音もなく、けれど思い切って開くのを見た気がした。

（原田（はらだ）マハ「リーチ先生」より。一部省略がある。）

（注）※エッチング……銅版画。
※書生……他人の家に世話になって、家事を手伝いながら勉学をする者。
※鳶色（とびいろ）……やや黒みを帯びた茶色。

問1　①まったく、困ったやつだ。無責任に、誰や彼やとこの家に送り込んできよって……。とありますが、このときの光雲（こううん）の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　二人の面倒をみるため、作品づくりに打ち込むことができないので迷惑がっている。
イ　どのように生計を立てていったらよいのか、見通しが立たないために困惑している。
ウ　外国人から頼られるくらいに、自分が彫刻家として海外でも評価されて喜んでいる。
エ　言葉とは裏腹に、芸術の道を志す二人のことを見守ろうという温かな気持ちでいる。

問2　②その強く確かな思いとありますが、リーチはどのような思いで日本へやってきましたか。次の空欄にあてはまる内容を、四十字以上、五十字以内で書きなさい。

日本の文化や芸術をもっと学ぶとともに、

（解答欄）

という思いで日本へやってきた。

問3　③ぐったりとうつむいて、下駄（げた）のつま先ばかりを眺めていた。とありますが、このときの亀乃介（かめのすけ）の心情を次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、**違い**、**もどかしさ**の二つの言葉を使って、四十字以上、五十字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。

通訳の疲れに加えて、初めて美術学校に行ったことで、

（解答欄）

を感じていた。

問4　④リーチの言葉を聞いて、亀乃介の胸の中に一陣の風が吹き込んだ。とありますが、これは亀乃介のどのような様子を表していますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　リーチの言葉によって、自分が激励されていることに気づき、こんなにも自分を気遣ってくれたのかと、改めて感謝している様子。
イ　リーチの言葉によって、自分が将来どのように進んだらよいのかが見えたことで、希望を抱いている様子。
ウ　リーチの言葉によって、芸術家になれるという確信が得られたことで、今まで以上に自信に満ちあふれている様子。
エ　リーチの言葉によって、自分に共感してくれていることがわかり、すばらしい理解者に出会えたことを喜んでいる様子。

□

問5　本文の表現について述べたものとして**適切でないもの**を、次のア～オの中から**二つ**選び、その記号を書きなさい。

ア　「じっとりと汗がにじみ出る」のように、擬態語を用いることで、登場人物の様子や心情が効果的に表現されている。
イ　登場人物の会話がかぎかっこの部分以外にも挿入されることによって、場面を補うはたらきをしている。
ウ　現在と過去、そして未来へと場面が交錯することによって、亀乃介の成長していく様子が多面的に描写されている。
エ　「頭上いっぱいに薄い雲のように広がる桜」「漆黒の中にやせ細った月」などの比喩によって、読者が情景をイメージしやすくなっている。
オ　芸術に対する熱い思いが、亀乃介やリーチ、光雲の視点からそれぞれ語られることで、読者が登場人物の考えを理解できるようになっている。

□と□

二

次の各問いに答えなさい。

問1　次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。

(1)　養蜂について調べる。

(2)　エジプト文明が隆盛を極める。

(3)　萎えた気持ちを奮い立たせる。

(4)　国家間で互いのケンエキを争う。

(5)　的をイた質問をする。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
		えた		た

問2　次の＝部「見る」と活用の種類が同じ動詞を、あとのア～エの文の――部から一つ選び、その記号を書きなさい。

遠くの景色を見る。

ア　本を読むときは部屋を明るくする。

イ　不要な物を捨てれば物置が片付く。

ウ　次の休日には犬と一緒に来よう。

エ　毎朝六時に起きてラジオを聞く。

□

問3　次の――部と═部とが反対の意味になるように、あとのア～オの漢字を組み合わせてそれぞれ二字の熟語をつくります。このとき、□に**用いない漢字**を一つ選び、その記号を書きなさい。ただし、同じ漢字は一度しか用いません。

私の提案は、説明が十分ではなかったために班員から□□されてしまった。しかし、根拠を明確にして丁寧に説明を重ねたら、今度は無事に□□を得ることができた。

ア　賛　　イ　拒　　ウ　諾　　エ　否　　オ　承

問4　次の═部「の」と同じ意味（用法）であるものを、ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

野鳥を観察するのが友人の趣味だ。学校からの帰り道に、公園アの近くまで来ると、鳥イの鳴く声が聞こえた。探してみると、珍しい鳥を見つけた。「あの鳥の名前は何と言うウの。」と私が尋ねると、友人は「シラコバトだよ。野鳥を観察して、鳥の名前を調べるエのも楽しいよ。」と教えてくれた。

問5　次の会話の空欄にあてはまる言葉を、漢字三字で書きなさい。

生徒「言葉の中には、本来の意味と異なって使われているものもあることがわかりました。」

先生「例えばどのような言葉がありましたか。」

生徒「『□』という言葉を辞書で調べてみると、『本人の力量に対して役目が軽すぎる』というのが本来の意味であることがわかりました。私は『役目が重すぎる』という意味で理解していました。」

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

侘(わ)びの美が芸術としての茶道で表現されるとすれば、その美と芸術とは日常的・実用的態度からのエポケー※機能を備えているはずである。そのことは、私たちが茶を飲む道具としてだけ茶碗(ちゃわん)を用いるのではなく、むしろ美的鑑賞の対象としてそれを見るということに端的に表われているだけでなく、茶室へと通じる「露地」の持つ特性にもよく表われている。※谷川徹三(たにかわてつぞう)は露地の意味を説明して「それは外の世界からすなわち日常生活的空間から、茶という別世界に導きいれる通路たるところにある」と述べ、①彼が「芸術的隔離性」と呼ぶ日常空間から離脱する芸術の特性を、茶道もまた持つことを認めている。

しかし、これは芸術としての侘び茶が他の芸術一般と共通に持つ形式的特性であって、現実的時空からの※乖離(かいり)を旨(むね)とする芸術的エポケーにほかならない。同じように私たちは、美術館の入り口から展示室に至る通路でも日常生活空間から離脱するだろうし、書院座敷の茶で用いられる華麗な天目(てんもく)茶碗をも美的対象として鑑賞する。また、私たちが茶碗の美に見入るとき、そこで「美的エポケー」がなされていることもまた、通常の美的体験と同様である。

侘びの美を特殊なものとするのは、むしろ、現実の時空から隔離された後に人が導入される世界の有様である。人は、利害と名聞にまみれた俗世の※塵境(じんきょう)を去って清浄地へと招き入れられるのであり、侘び茶室が簡素・簡略を重んじるのもまさにそれゆえである。

バチカン宮殿の天上にびっしりと書き込まれた美しい無数の絵画と比較してもいいだろう。その宗教的空間も、確かに人の日常的空間からは隔絶しており、日常的因果連関からは切り離されている。また私たちはその絵画を何らかの実用に供しようとして見てはいないし、また研究者として解明的な目で見てはいないから、美的エポケーも成立しているとしよう。しかし、その天井画には、通常の日常生活にはありえないほどの多彩な意匠が描き込まれている。その様子は、やはり内容的に見ても日常的な状況を逸脱していると言えるが、それは※豊饒(ほうじょう)さへと逸脱しているのである。

②侘びの美の世界は、むしろ反対の方向へ進む。芸術的エポケーによって現実の時空から乖離するのは共通だが、その内容においては、日常世界の持つ通常の豊饒さ、装飾、斉一さを去って数的乏しさ、簡素さ、不均斉へと導き、しかもそこに美を発見せしめるのが侘びの美の特徴なのである。侘びの美は、通常の物質的豊かさをあえて差し控えるのである。

例として、利休(りきゅう)朝顔の話をあげておこう。あるとき利休の庭の朝顔が見事に咲いているということを秀吉(ひでよし)に伝えた者がいて、秀吉は見たいと思って朝の茶会に出かけたが、庭に一枝も朝顔がないのでたいそう不機嫌になった。そうして茶室に入ると色あざやかな一輪の朝顔が床に生けてあった。秀吉をはじめ供の者たちもみな目が覚める心地がして、③利休は非常に称讃(しょうさん)された。これは利休がその朝すべての朝顔を切り、ただ一輪のみを生けたものと思われるのである。

開示機能の一契機として芸術作品が人の体験を量的に拡大してくれるという側面が、侘びの美の場合、非常に限定的であると言わねばならない。利休朝顔の話にあるように、侘びはもともと簡素さ、数的乏しさを旨とするのであるから、人の見知らぬ新奇な対象を草庵(※そうあん)に満たすというようなことはなく、むしろ量的には減少の方向へ向かうのである。すると、この場合、開示機能はむしろ第二の契機、すなわち現実への眼差し(まなざ)しの質的転換が主となるはずである。この転換はどのような特徴を持つのだろうか。

人の日常生活はさまざまな物に取り囲まれていて、私たちはそれを利用しながら生きている。たとえば自分が身につけている服や靴、身の周りの机、イス、カップ、周りにいる誰それ等々。私たちの暮らしが円滑に行なわれるためには④私たちはそれらに一般名を付け、事物や出来事の進行を把握する。たとえば「佐藤は椅子に座りコップを手にとって水を飲む」。このとき私たちの悟性（理解力）は身の周りのものを概念的に把握してラベルを付け、それらの関係を認識するが、この把握は私たちが個々の事物を深く見つめることを妨げる。そうしないと人の実生活は滞るからである。

美としての侘びの戦略は、この悟性の活動を縮減することにある。数的な乏しさは私たちが多くの事物に囲まれているときに働かせている悟性の概念的把握および規則性への志向を停止し、目の前にある一個の茶碗、一服の軸に私たちの意識を集中させる。そしてその集中した事物において再び悟性の働きを超える事象の新鮮な変化を構想力が捉えるとき、私たちはそこで現実と新たに触れなおして美を意識する。日常において悟性が活発に働いているとき、私たちはむしろそこに単調さを感じる。概念で括(くく)られたものは見慣れた日常でしかない。私たちがそこに美を見出すとすれば、活発に働く悟性の規則性への志向を超えて活動するさらに活発な構想力の働きが必要であろう。ところがこの悟性の働きが戦略的に縮減されれば、私たちの構想力はやすやすとそれを超えるだろう。人が茶碗に銘を付けるのは、それを茶碗一般としてでなく、私たちが向き合うべき一つの対象とするためであり、私たちが一個の茶碗に見入るときもはや「茶碗」という普遍的概念は消え、それが持つ微妙な景色を眺めて人はそこに美を見出す。

もちろん、こうしたいわば個別への集中は、西洋美術でもなされている。侘びの美の特色は、それを自覚的に徹底して行なうところにあろう。しかも侘びにおいては、こうした集中が、均斉を欠き、色彩に乏しいものへなされるのである。均斉はそれだけで悟性を刺激し、喜ばせる。また、強い色彩の対照はそれぞれの色を持つ個別的なものを際立たせると同時に悟性にそれらの関係の思考を訴える。単調な色彩は秋の夕暮れ時の景色のように、すべてを一体化し、思考を眠らせる。

それではなぜ侘びはこうした⑤美的戦略を持つのか。※大拙は「醜や不完全なものを通して、完全感を表現する」とも「一即多」とも言う。あえて表現を乏しくすることで、その切り詰められた現実の中に全体が宿っていることを知らしめるというわけである。私たちの実用的な雑念を払拭し、悟性の概念的働きを休めて私たちが目の前の些細な現実に向かうとき、私たちはそこに私たちの思考を超えた無限を、美として見出すのであり、侘びの美はそのように人が己の脚下に目を向けるべきであることを、美を通じて知らしめるのである。

侘びの美はその独自な芸術的構えによって私たちの脚下にある現実を見つめ直させる。これは大量生産と大量消費の時代を超えて進むべき現代人の生活指針としても、なにほどか教えるところがあるのではないだろうか。

（佐藤　透「美と実在――日本的美意識の解明に向けて――」より。一部省略がある。）

（注）※エポケー機能……「エポケー」とは立ち止まること、停止すること。ここでは、判断を停止するはたらきのこと。

※谷川徹三……哲学者。（一八九五～一九八九）

※乖離……そむき離れること。

※塵境……ちりで汚れた世界。

※豊饒さ……豊かに多いこと。

※草庵……わら・かやなどで屋根をおおった粗末な家。

※大拙……鈴木大拙。仏教学者。（一八七〇～一九六六）

問１　①彼が「芸術的隔離性」と呼ぶ日常空間から離脱する芸術の特性とありますが、茶道における「芸術的隔離性」を説明したものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　茶道において、茶碗（ちゃわん）を美的鑑賞の対象よりも、茶を飲む道具として実用的に用いるということ。

イ　茶道において、茶室への通路が現実から茶の世界へ導きいれる役割を果たしているということ。

ウ　茶道において、書院座敷の茶によって利害と名聞にまみれた俗世の塵境（じんきょう）へと招き入れるということ。

エ　茶道において、一つの体験が量的に拡大されることで日常の生活からは隔絶されるということ。

（解答欄）

問２　②侘びの美の世界は、むしろ反対の方向へ進む。とありますが、次は、筆者が考えるバチカン宮殿の天井画と侘び茶室の「芸術的エポケー」の違いについてまとめたものです。空欄アにあてはまる内容を、十字以内で書きなさい。また、空欄イにあてはまる言葉を、本文中から五字で書き抜きなさい。

バチカン宮殿の天井画	［ア］ことによって、日常にはない豊かさへと逸脱し、現実の時空から隔離する。
侘び茶室	［イ］、簡素さ、不均斉へと導くことによって、通常の豊かさを差し控え、現実の時空から隔離する。

ア（十字の解答欄）

イ（五字の解答欄）

問3　③利休は非常に称讃（しょうさん）された。とありますが、その理由として**適切でないもの**を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　朝顔を一輪だけにすることで、現実とは切り離された別世界へ導くことができたから。
イ　庭のすべての朝顔を切ることで、茶室の一輪の朝顔だけに注目させることができたから。
ウ　新奇な対象を茶室に満たすことで、一輪の朝顔のあざやかさを際立たせることができたから。
エ　朝顔を一輪生けることで、向き合うべき一つの対象として美を意識させることができたから。

問4　④私たちはそれらに一般名を付け、事物や出来事の進行を把握する。とありますが、これと同じ内容を表している部分を本文中から十八字で探し、そのはじめと終わりの三字をそれぞれ書き抜きなさい。

はじめ　～終わり

問5　⑤美的戦略を持つとありますが、筆者は、侘びの持つ美的戦略はどのような契機をもたらすと考えていますか。次の空欄にあてはまる内容を、**現実**、**悟性**の二つの言葉を使って、三十五字以上、四十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。

侘びの持つ美的戦略は、［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］という契機をもたらす。

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（----の左側は口語訳です。）

①相模守時頼（さがみのかみときより）の母は、松下禅尼（まつしたのぜんに）とぞ申しける。守を入れ申さるる（招待なさる）事ありけるに、すすけたる明り障子（さうじ）のやぶればかりを、禅尼手づから（自分の手で）、小刀して切りまはしつつ張られければ、兄（せうと）の城介義景（じやうのすけよしかげ）、その日のけいめいして候ひ（さうらひ）ける（世話役をつとめて、そばに控えていた）が、「給はりて（たまはりて）、なにがし男に張らせ候はん。②さやうの事に心得たる者に候ふ。」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ（はべらじ）（まさかまさってはいないでしょう）。」とて、なほ一間（ひとま）づつ張られけるを、義景、「皆を張りかへ候はんは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも見苦しくや。」とかさねて申されければ、「尼も、後はさはさはと（さっぱりと）張りかへんと思へども、今日ばかりは、わざとかくて（こうして）あるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見ならはせて、心づけんためなり。」と申されける、③いとありがたかりけり。

（「徒然草（つれづれぐさ）」より）

問1　給はりて（たまはりて）とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、すべてひらがなで書きなさい。

問2　①相模守時頼（さがみのかみときより）と同じ人物を表している言葉を本文中から探し、三字以上、五字以内で書き抜きなさい。

問3　②さやうの事とありますが、ここではどのようなことを指していますか。次の空欄にあてはまる内容を、十字以内で書きなさい。

□□□□□□□□□□こと。

問4　③いとありがたかりけり。は「たいそう立派なことであった」という意味ですが、これは、尼のどのようなことに対して述べたものですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　倹約を心がけていなければならないと教えようとしたこと。
イ　才能ある人物を大切にしなければならないと教えようとしたこと。
ウ　年長者の意見を尊重しなければならないと教えようとしたこと。
エ　見苦しい部分を一新しなければならないと教えようとしたこと。

□

五

下は、ある中学生が「書き言葉によるコミュニケーション」について発表した資料の一部です。

国語の授業で、「文字で伝える際、重視すること」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。この資料から読み取ったことをもとに、次の（注意）に従って、あなたの考えを書きなさい。

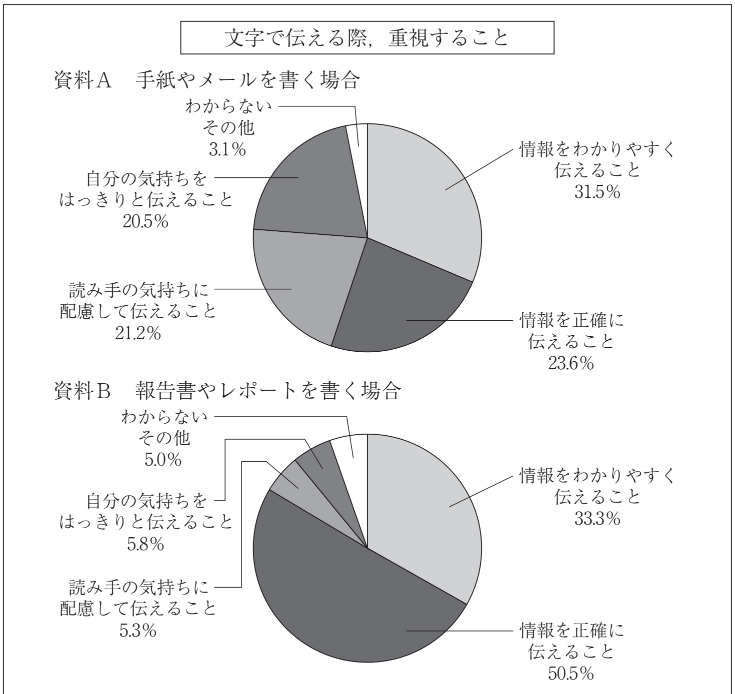
（注意）

(1) 段落や構成に注意して、自分の体験（見たこと聞いたことなども含む）をふまえて書くこと。

(2) 文章は、十三行以上、十五行以内で書くこと。

(3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

(4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。



（四捨五入による端数処理の関係で，資料A・資料Bともに合計が100%になりません。）

文化庁『平成28年度　国語に関する世論調査』から作成

15　13

二〇一八年度　埼玉県公立高校入試問題

一

解答

問1、エ　問2、イギリスの文化や芸術を日本の人々に知ってもらう東西の文化交流を、自分にしかできない方法でやりたい（48字）（同意可）　問3、生徒たちとの境遇の違いに意気消沈し、芸術への思いは募ってもかたちにすることができないもどかしさ（47字）（同意可）　問4、イ　問5、ウ（と）オ

解説

問1、リーチが差し出した「この家の住所と、『高村光雲　光太郎』と書かれてある紙片」を光雲が「手に取ると微笑んだ」ことや、「困ったやつだ」と言いながらも「愉しげなまなざしを、亀乃介に向けた」ことから考える。

問2、リーチが「東西の文化交流」を夢見てイギリスから日本へやってきたことをふまえて、「日本の文化や芸術をもっと学びたい…自分にしかできない方法で」「東西の交流のために…ここまでやって来ました」と熱っぽく語っていることに着目する。

問3、亀乃介が美術学校で生徒たちの様子を見て、「この教室にいる生徒たちは、全員…恵まれた人だ」「あまりにも、違うのだ…自分とは」と、「意気消沈」していることをおさえる。そして自分のことを振り返り、「芸術家になりたい…それでほんとうによかったのか」「描きたい、創りたいという思いは募れど…どうすれば突破できるのだろうか」と悩んでいる。

問4、美術学校の生徒たちの様子を見て、自分は「芸術のことなど何もわからない、無粋な人間」だと思っていたが、「芸術家になれる素質がある」「いつか海を渡る日がくる」とリーチに言われ、「芸術の世界への扉」が開くのを見たと感じていることから考える。

問5、未来の場面はなく、時系列に沿って場面が進んでいる。また、光雲は芸術に対する思いを語っていない。

二

解答

問1、(1)ようほう　(2)りゅうせい　(3)な（えた）　(4)権益　(5)射（た）　問2、エ　問3、ア　問4、エ　問5、役不足

解説

問2、「ない」をつけると、直前の音が「イ段」の音になる上一段活用。アは五段活用、イは下一段活用、ウはカ行変格活用。

問3、順に、「拒否」「承諾」があてはまる。

問4、「～こと」で置き換えられるので、体言の代用になる格助詞。アは連体修飾語を表す格助詞。イは主格を表す格助詞。ウは疑問を表す終助詞。

問5、本人の力量に対して「役目が重すぎる」場合は、役目に対して役者自身の力が不足している状態なので「力不足」という。

三

解答

問1、イ　問2、ア、多彩な意匠を描き込む（同意可）　イ、数的乏しさ　問3、ウ　問4、（はじめ）悟性の（～終わり）の志向

問5、悟性の活動を縮減することにより、構想力を活発に働かせて美を見出し、現実を見つめ直させる（43字）（同意可）

解説

問1、谷川徹三は、「茶室へと通じる『露地』」の意味を「それは外の世界から…通路たるところにある」と説明している。

問2、ア、バチカン宮殿の天井画について、前の段落で「通常の日常生活にはありえないほど…豊饒さへと逸脱している」という特徴を述べている。イ、侘びの美の世界について、共通点を挙げながらも「その内容においては…そこに美を発見せしめる」という特徴を述べている。

問3、侘びについての、「人の見知らぬ新奇な対象を草庵に満たすというようなことはなく」という部分に合わない。

問4、「たとえば」として、「このとき私たちの悟性…概念的に把握してラベルを付け、それらの関係を認識する」とくわしく言い換えている。さらに美としての侘びの戦略は、「私たちが多くの事物に囲まれているとき」に働かせているこの「把握」を、「縮減」または「停止」させることだと述べていることに着目する。

問5、侘びの美について、「人が己の脚下に目を向けるべきであることを…知らしめる」「その独自な芸術的構えによって…現実を見つめ直させる」と述べていることをおさえる。また「美としての侘びの戦略は…悟性の活動を縮減すること」であり、日常に美を見

出すとすれば、「活発に働く…構想力の働きが必要であろう」と述べていることをふまえてまとめる。

四

解答

問1、たまわりて　問2、若き人　問3、障子を張りかえる（同意可）　問4、ア

解説

問1、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

問2、松下禅尼は「守を入れ申さるる事」があるときに障子を修理しており、「なにがし男に張らせ候はん」「皆を張りかへ候はん」と言う兄の城介義景に、「物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞ…心づけんためなり」と意図を話していることをおさえる。

問3、松下禅尼が「すすけたる明り障子のやぶればかりを…張られけ」るという作業をしているときに、兄の城介義景が声をかけていることに着目する。

問4、松下禅尼が「物は破れたる所ばかりを…心づけんためなり」と言って障子を張りかえていることに対して、筆者は立派だと評している。

口語訳

相模守時頼の母は、松下禅尼と申した。相模守を招待なさることがあったときに、すすけた障子の破れたところのみを、禅尼が自分の手で、小刀を使ってあちこち切ってはお張りになっていたので、兄の城介義景が、その日の世話役をつとめて、そばに控えていたが、「障子を張る仕事をこちらにいただいて、何とかいう男に張らせましょう。そのような仕事に精通した者でございます」と申し上げられたところ、「その男は、私の手作業よりまさかまさってはいないでしょう」と言って、依然として一区切りずつ張られていたのを、義景が、「全体を張りかえますほうが、はるかに簡単でございましょう。障子紙がまだらになりますのも、見苦しくはございませんか」と重ねて申し上げられたところ、「私も、後でさっぱりと張りかえようと思っていますが、今日だけはわざとこうしているのです。物とは破れた所だけを修理して用いるものであると、若い人に見習わせて、心がけさせるためなのです」と申し上げられる。たいそう立派なことであった。

五

解答

（例）

資料から、報告書やレポートでは情報を正確に伝えることが重視されており、手紙やメールの場合は読み手の気持ちに配慮して伝えることも重視されているとわかる。私も、レポートはむだなく誤解を招かないように書くことを心がけているが、手紙やメールは個人的なやり取りが多いので、表現や言葉づかいを相手との関係によって変えている。目的や機会に応じて、適切な表現で言いたいことを正確に伝える文章力は、公式な文書でも、友達とのコミュニケーションでも、とても重要だと思う。（15行）